紅い魚

前川　美和

師走の日曜日、日差しが柔らかく感じられる昼下がり、西森裕子は三歳になった娘の沙代の手を引いて、家の近くの池までぶらぶら歩いていた。この辺はひと昔前まで新興住宅地で、子どもたちの声が響き活気に包まれていたが、いまは住民が高齢化しひっそりとしている。途中、池のほうからポチャリという音が聴こえた。大きな魚でも跳ねたのだろう。その池は農業用の人工池だ。夏にはホテイアオイが一面に広がり、薄紫の花をつける。盛りを過ぎると、大型の浮草は皆枯れて、無残な姿を曝すことになり、異臭さえ放つのだが、冬が近づく頃には、それらはどこかに消えてしまい、鴨たちが渡ってくる。きょうも鴨を見ようと、散歩がてらやってきたのだ。

「鴨さん、いるかな？」とじっと目を凝らすと、対岸近くに二羽、水面にかすかな波紋を残しながら泳いでいた。

「沙代、あそこにいるよ。ほら」と指差しつつ、ふと右側の岸寄りに目をやると、鮮やかな赤い色が見えた。だれかが何か赤い物を捨てたのかしらと近づいてよく見ると、赤い色に見えたのは紅い魚たちの固まりだった。金魚と鯉の中間くらいの紅い魚たちがゆらゆらと群れているのだ。一匹一匹の体から濃い朱色が滲み出し、池を染めているような錯覚に襲われて目をこすった。遠くから見ると、緑色の濁った池に直径一メートルほどの赤い円が描かれているという不思議な光景になっている。

「沙代、見える？　紅い魚がいっぱいいるよ」

「えっ、どこ？　お母さん、沙代見えない」

裕子は奇妙な魚に興奮して、一生懸命教えるのだが、なぜか沙代には紅い魚を見つけることができないようだった。初めて出会った情景にしばらく心を奪われていたが、何気なく視線を上げると、池の右岸に面して建てられた家の窓から、池を眺めている女の人が目に入った。彼女も紅い魚を見ていた。食い入るように見つめている横顔はひたすら冷たかった。目が合って、互いに軽く会釈した。

裕子は紅い魚にまつわる言い伝えを聞いたことがある。山の中で喉が渇いた村人が、水を飲もうと川の水を掬うと、なぜか小さい紅い魚が入ってくる。何度掬っても入ってくるので、仕方なく飲んでしまうと、喉の渇きが増した。飲めば飲むほど喉が渇き、夢中で水を飲み続け、気がつくと大蛇の姿に変わってしまっていたというのだ。紅い魚は人間世界と異形の者の世界を仲立ちする生き物として描かれていた。

今眼下には無数の紅い魚が存在している。

裕子は、三年間共に暮した夫と別居して一年になる。大喧嘩をするたびに、離婚届を持ってきたら、いつでも判子を押してやる、と息巻く夫の言葉を信じ、すぐ離婚できると思い込んでいた自分の甘さを、嫌というほど思い知らされた一年だった。

夫とは、職場である介護施設で知り合った。他人の悪口を言わず、利用者にそつなく接する様子から、信頼できる人だと思ったのだが、実際に一緒に生活するにつれて、彼の本性が見えてきた。最優先されるべきなのは自分の生活リズムで、他のことや他の人には関心を持たない人だった。休日も寝ているかテレビを見ているかで、夫婦で出かけることもなかった。一番理解に苦しんだのは裕子と性交渉を持とうとしないことだった。夫の両親からは孫を催促されるし、裕子自身も、子どもができれば夫婦関係も改善されるのではないかと思ったのだが、なかなか協力してくれず、排卵日だと告げても、

「そんなことは九時までに言ってくれ。明日は早出なんだ」と怒り出す始末だった。諍いが繰り返される中、やっと授かったのが沙代なのだ。

沙代が生まれてからは沙代にべったりで、目の中に入れても痛くないほどの可愛がりようなのだが、裕子には相変わらず無関心で、触れようとすらしない日が続いた。産後半年経ったある夜、思い切って自分から夫を誘ったが、

「育児で疲れてるんだ」と取り付く島もなかった。その瞬間、スーッと心が冷えていくのを感じた。何かが終わった一瞬だった。

その日を境に、裕子は離婚に向けて動き出した。親権を取るため、沙代を保育園に預けフルタイムで働ける仕事を見つけた。忙しい日々を送るうちに、一緒に暮している夫が、見知らぬ人のように見えてきて、そんな人と娘を挟んで川の字になって眠るのに耐えられなくなり、沙代を連れて家を出た。

別居直後から、夫は自分の休みに合わせて沙代との面会を要求し、年度が変わり週末が休めるようになると、隔週末二泊三日の面会を求めた。この条件を飲まなかったら、保育園から連れ去るぞ、という脅迫まがいの要求に負け、ずるずる一年が過ぎた。

「おまえに会わず、週末沙代と過ごせる今の状態が俺にとって一番都合がいい。おまえに愛情はないが、親権は無くしたくないから、離婚するつもりはない」と言い張る夫に対し、裕子は憎しみを通り越して哀れみさえ感じるが、もう関わり合いを持ちたくなかった。自分の世界から夫が消えてしまって欲しい、と心から願っていた。

正月休みも終わるある日、一人で池の縁に佇む裕子の視線の先に、またあの赤い水面があった。そして、その下には無数の紅い魚がうごめいていた。きょうも魚の赤い色が水に溶け出したように滲んでいる。しばらく放心状態で眺めていたが、視線を感じて右岸の家を見上げると、この前見かけた女の人がこちらをじっと見つめていた。目が合うと、彼女は薄く笑った。

彼女、寒川章子は母親と年老いた猫と一緒に暮していた。母とは昔から馬が合わなかった。母から褒められたことも抱き締められた記憶もなかった。章子が父親に似ていたせいかもしれない。母は二つ上の兄を可愛がり、鉛筆やクレパスといった文房具から、着る物や習い事に至るまであからさまに差をつけた。兄に老後の面倒をみてもらうつもりだったようだ。兄が大学進学のため家を出て、そこで仕事に就き結婚し、嫁の実家の近くに家を建てたことをひどく悔しがっていた。章子は真面目な銀行員の父を慕っていたが、母はおとなしい父を、金を運んでくる同居人としかみていないところがあった。定年後も「ガードマンでもなんでもして稼いで来てよ。家に一日中いられたら、鬱陶しくて仕方ないし」などと平気で言った。その父が十五年前肝臓癌で死ぬと、古い家に持病のある母を一人で置いておくわけにもいかず、一人暮らしのアパートから実家に戻ったのだ。教師をしながら、母との索漠とした日々を送るうちに四十三になっていた。

母は七十二になり、膝を痛め、外に出る機会は減ったが、口だけは達者で、若い頃の自慢話、兄への恨み、近所の人の悪口など、何十回何百回聞かされた話を繰り返し、章子の立ち居振る舞いにもいちいちけちをつける。大きな猫を抱いてテレビ漬けの毎日を過ごしているからか、最近は物忘れがひどくなって、鍋を焦がしたり、病院でもらってきた薬を間違えて飲んだりするので、目が離せないと感じることも多い。自分を育ててくれた母だから、世話をするのは当然だと頭では納得しているが、これから認知症も進み、壊れていくであろう将来を考えると、心が闇に沈んでいく。

そんなある日、母はテレビを見ていて、人気タレントが結婚することを知り、

「四十過ぎても嫁に行けないなんて情けない。先生なんかしている理屈っぽい女は可愛げがないからね。全く」と言い放った。思いやりの欠片もない棘のある言葉に、涙を隠すように二階に駆け上がり、窓に干しておいた布団を取り込もうとしたところ、布団の上で昼寝をしていた猫がいきなり手に噛み付いた。鋭い痛みに猫を引き離そうと強く腕を振った拍子に、猫が窓から飛び出し池に落ちた。一瞬の出来事だった。猫が沈んだ池の水面をじっと見下ろしていると、その辺り一面が濃い朱色に染まってきた。思いがけない鮮やかな紅の出現にとまどいつつ、目が吸い寄せられた。我を忘れて見つめていると、どこからか若い女の声が聞こえてきた。

「見える？　紅いお魚が一杯いるよ」池のフェンス越しに、幼い女の子を連れたほっそりした女の人が見えた。二人の目が合ったとき、章子は一瞬たじろいだが、動揺を隠し目礼した。一見幸せそうな若い女から、自分と同じような暗い匂いを嗅ぎ取っていた。

それから一ヶ月ほど後、その若い女は今度は一人で池の前に立っていた。一心に池の紅を見る彼女の何かに憑かれたような姿を見て、章子はただならぬものを感じた。そして、共犯者めいた微笑を送った。

その池は二、三年前までは田んぼに水を引くため池として利用されていた。数件の農家がそこの水を使って、稲を育てていたのだ。しかし、水がすっかり汚れてしまったため、どの農家も使うのをやめてしまった。それで、自治会の集会で安全面も考えて、埋めたほうがいいという話になった。ただ億単位の予算がなかなか取れず、埋め立ては結局五年後に実施された。初めに以前大掛かりな池の清掃を行ったときのように、池の水を干してしまおうと、何日か掛けて水が抜かれた。

そこには紅い魚は一匹もいなかった。ところが、大き目の猫の骨と人間の白骨化した遺体が二体見つかり、しばらくの間ワイドショーの話題に上っていた。

（原稿用紙十枚）